同窓会会報
第41号
昭和63年1月25日
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
〒319-03 TEL 0292-59-2811
振替口座 宇都宮3-1632番
印刷所
佐藤印刷株式会社

「組織とは連絡なり」の実行

―同窓会大会とこれからの方向―

会長　和田文雄

去る十一月十四日に開催された第十八回同窓会大会で会長に選任されましたのでご挨拶申し上げます。また別掲のとおり副会長、常任委員の改選も行われ、同時に事務局長、総務、組織、情報の各部長も選任され、すでに業務を担当しております。

大会では、都道府県単位の出席状況、代議員制の現状、会費の納入状況、支部の活動状況及び学生の応募、入学状況などについて、活発に論議されました。これらを受けて近々中に常任委員会をひらき、具体的な執行方法をつくることとなりますが、その措置の方法として次のことが考えられます。

一、組織・機関について

本部、都道府県支部に加えて、期別、職場別及び県内地区別の連絡組織網をつくることであり、かつそれらが、毎日、毎週、毎月、毎年何らかの連絡をとりあうことにあります。「組織とは連絡なり」との名言を実行することです。そして、支部からの連絡が出発点となります。

二、大会の構成

規約第一〇条では、代議員は各都道府県支部一名及び支部会員が二〇名を超えたときは、会員二〇名毎に一名を選出する」こととなっていますが、これはいままで実行されたことはありません。二〇名を超えて一名を選出することを見直し、一〇〇人に一人位に改めてはどうか。また、代議員には旅費実費の支払いと、会費の納入状況により代議員の資格、員数を審査することなどです。

三、支部長会議の隔年開催

大会が二年に一度ですから、この間の年に支部長会議を開催してはどうか。

四、事務局体制の強化

事務局に、総務、組織、事業の三部を設け、各部の分掌規程を定めて責任体制を明確にし、各部には部長、次長の各一名を選任します。

五、支部組織等との連絡・連携の強化

常任委員は卒業期別（期担）及び都道府県別（県担）に担当を分担して、支部、本部の日常行事、組織行事、期別世話人との連絡を密にし、支部会、期別会に必ず出席することです。

六、会費の納入方法の改善

①会員の農協の預貯金口座から、農協のオンラインシステムによる会費の引落し制度の導入をはかりたいと考えます。

②終身会費の額を改訂するとともに、終身会費の納入しやすい年頃を対象にこれを極力推進したいと考えます。

終身会費の額は、卒業期を千円と読みかえ、それに二万円を加えた額としてみます。（例、一期生を一万一千円として、七期生は一万七千円、四十期生は一万円＋四万円＝五万円）これはホフマン方式による平均余命を基準に、物価変動率を加味して作成した現行会費をわかり易くなおすとこうなります。

七、新たな事業への対応

学生、教職員の福利厚生施設への協力として、学生、教職員を対象とした消費生活（生産）協同組合への協力を推進してみます。

以上のことがらを、一月下旬に予定する常任委員会におはかりして、順次実行に移してはどうかと考えますが、各支部、期別、そして会員一人ひとりのご意見をおまちしておりますので、是非本部までお寄せ下さい。

「農業経営活動状況調査」への協力のお願い

同窓生各位

鯉渕学園長　松本正雄
同窓会長　和田文雄

同窓の皆様にはますますご健勝のことと拝察申しあげます。

さて、学園も創立以来四〇年を経過致し、学園の存在意義と社会への貢献度を世に問う時期が参ったように考えます。

そこで、今回は、皆様の農業経営について別紙事項をお知らせ願い、「活動状況リスト」を作成するとともに、逐次、「地域別」「経営類型別（部門別）」に執筆願い、「会報掲載」や、「事例集」として公刊していきたいと存じます。よろしくご協力の程お願い申しあげます。

なお、農協や普及所にお勤めの方は、地域で農業経営をされている同窓生の経営についてご紹介下さい。期限を二月末日までと致したいので早めにご返報下さい。

第十八回同窓会大会報告

昭和六十二年十一月十四日、經濟学園に三十五名の代表者が集まり、第十八回の同窓会大会が開催されました。

大会は、和田会長の挨拶、続いて永年勤続者（中嶋由春氏）への記念品贈呈の報告がなされた後、議長に福丸博房氏（東京九期）を選出、書記に山本英治（学園三十一期）浦井義郎（同）、議事録署名人に関正治（学園四期）鈴木幹男（茨城九期）石田善吾（東京十六期）の各氏を任命して議事に入りました。

議題の昭和六十一・六十二年度事業報告並びに決算報告承認の件、昭和六十三・六十四年度事業計画並びに予算の件、会則の一部改正の件、昭和六十三・六十四年度役員の選出の件については、執行部の報告・提案並びに推薦委員会の役員推薦の通り承認可決されました。大綱は次の通りです。

一、昭和六十一年・六十二年度事業報告

第十七回大会の決定に基づいて実施された両年度の事業は次の通りです。

(一) 会報の発行

第三十七号　昭和六十年十二月十日
第三十八号　〃六十一年三月二十五日
第三十九号　〃六十一年八月五日
第四十号　〃六十二年八月一日

(二) 会員名簿の発行

昭和六十一年七月発行、一、〇〇〇部。おおよそ五年毎の発行となっている。

(三) 經濟学園寮史の発行

昭和六十二年三月の発行を予定していたが計画通り進行せず、次年度に事業を継続の必要がある。史実の整理が済み、年表・資料集を仮印刷中である。（印刷途中の一部を大会に提示）

(四) 学園教育施設整備への支援

昭和四十七年、本会が学園に対し学園諸施設の配置計画について意見具申した「図書館両翼の建物は創学以来の記念建物として保存することとする」に沿って、改修する学園に対し総工費七〇〇万円全額を本会四十周年記念特別会計より支援し、昭和六十一年十一月に改修整備は完了した。

(五) 育林事業による分収林の管理

東京営林局との分収林契約に基づき、高萩営林署（茨城）の指導により、分収林三・三ヘクタールの下刈管理を実施した。

(六) 支部会への役員派遣

茨城支部役員会　高橋事務局長
岩手支部会　菊池常任委員
菊木支部会　鈴木副会長
兵庫　〃　坪野常任委員
福井　〃　和田会長
岩手　〃　関常任委員
岐阜　〃　砂田監事
兵庫　〃　菊池組織部長
新潟　〃　関常任委員
岩手　〃　高橋事務局長

(七) 学園への協力

① 学生募集の協力（会報、支部会での募集案内、依頼）を行なった。

② 学園長と各県支部役員との懇談を、事務局が仲介した。

二、昭和六十一年・六十二年度決算報告

両年度の決算報告は別紙決算書の通りです。

三、昭和六十三年・六十四年度事業計画

(一) 会報の発行

第四十一号　昭和六十二年十二月十日
第四十二号　昭和六十三年六月十日
第四十三号　昭和六十三年十二月十日
第四十四号　昭和六十四年六月十日

(二) 經濟学園寮史の発行

四十周年記念事業の残金をもって特別会計とし、継続して編集作業にあたる。整理された史実・資料の仮印刷をもとに編集委員会において早急に発行を計る。

(三) 分収林の管理

同右の特別会計により管理する。

(四) 支部組織の強化

(五) 学園への協力（学生募集他）

四、昭和六十三年・六十四年度予算

両年度の予算は別紙予算書の通り。

五、会則の一部改正について

会則第五章・第二十六条「入会金は三、〇〇〇円とし」を「入会金は一〇、〇〇〇円とし」に改める。なお、名簿代を含むものとし、入会者に名簿を渡すこととする。

六、昭和六十三年・六十四年度役員

会長　和田文雄　東京三期
副会長　渡辺正信　茨城七期
常任委員長　高橋隆三　学園九期
常任委員　市野沢弘　茨城十期
〃　三次えい子　茨城十一期
〃　真下寿宜　茨城十一期
〃　堀田　弘　茨城十五期
〃　江幡ゆき子　茨城二十三期
〃　本田　茂　菊木四期
〃　天笠真理子　埼玉十三期
〃　加藤成一　千葉二十四期
〃　福丸博房　東京九期
〃　石田善吾　東京十六期
〃　桑丸文明　神奈川八期
〃　学園在職会員全員

桜井、西村、関、坪野、

監　事　菊池、小沼、入江、山本、涌井、掛田、工藤、星野、池田、五十嵐、井上
〃　武内十郎　東京四期
〃　砂田義雄　学園五期
〃　本宮好美　茨城十二期

七、その他報告事項

① 故武田勉氏（五期、前農水省農業総合研究所）の著作集刊行の協力依頼について

② 同窓生の優良経営事例集刊行を学園として企画。事例の紹介など協力依頼について

③ 六十二年度学園祭に、同窓各位の協力により全国物産展を催し、六十万円規模の即売会を行なった。

新設された養液栽培施設（62年10月）
鉄骨2連棟硬質ビニール温室，1,000 m^2
栽培方式はサンスイＮＦＴで，トマトを栽培。

昭和61・62年度決算

1. 一般会計

1）財産目録

（単位：円）

	科目	金額	摘要
資産の部	現金	33,412	学園総務部に保管
負債の部	借入金	1,450,000	基本金会計より借入れ
純財産		△ 1,416,588	

2）収支明細表

収入の部

（単位：円）

科目	決算額	予算額	比較増減
前年度繰越金	61,738	61,738	
会費	1,919,500	3,300,000	△ 1,380,000
名簿代	741,000	1,250,000	△ 509,000
その他収入	896,467	50,000	396,467
合計	3,618,750	5,111,783	△ 1,493,033

支出の部

（単位：円）

科目	決算額	予算額	比較増減
会報発行費	1,047,840	1,200,000	△ 152,160
名簿発行費	1,194,000	1,200,000	△ 6,000
通信費	220,750	250,000	△ 29,250
人件費	240,000	600,000	△ 360,000
事務費	104,825	200,000	△ 95,175
会議費	188,573	400,000	△ 211,427
旅費	548,200	400,000	148,200
予備費	41,150	861,783	△ 820,633
合計	3,585,338	5,111,783	△ 1,526,445

収支差額　33,412（次年度繰越）

＊名簿在庫　630部×2,500円＝1,575,000円

2. 基本金会計

1）財産目録

（単位：円）

	科目	金額	摘要
資産の部	現金	138,076	学園総務部に保管
	預金	1,500,000	郵便局
	貸付金	1,450,000	57・58年度　30万 59・60年度　40万 61・62年度　75万
	合計	3,088,076	
負債の部		0	
純財産		3,088,076	

2）収支明細表

収入の部

（単位：円）

科目	金額	摘要
前年度繰越金	225,076	
入会金	663,000	61年度　3,000円×115 62年度　3,000円×106
合計	888,076	

支出の部

（単位：円）

科目	金額	摘要
貸付金	750,000	
合計	750,000	

収支差額　138,076

鮎の養殖と稲作の複合経営に励む野村夫妻（ともに27期生）

今回は、鮎の養殖と水稲との複合経営に取り組んでいる野村和寛・順子夫妻（共に二十七期生）を紹介したいと思う。

二人は長野県は佐久市、千曲川の豊かな水が二六〇〇haの水田を潤している地域、土地の人々は佐久平と呼んでいるところで暮らしている。当地方は江戸時代後期から独得な鯉、鮒の養殖法「稲田養鯉（とうでんようり）」と呼ばれる技術を発達させてきた。それは豊かな千曲川の水を利用して水稲田に深水を張り、鯉や鮒を飼い、米と合わせて魚もとろうとするものである。明治・大正・昭和（初期）と隆盛をきわめ、そこで生産された鯉は佐久鯉としてあまねく世に知れわたるようになった。

そうした伝統的な養殖法をしている地域の中で、和寛君の父親も千曲川の流水を利用した淡水魚養殖を手がけ、経営上の有利性を求めて鯉からニジマス、鮎と魚種の変遷はあったものの、魚種ごとにそれぞれの養殖法を確立していった。

そんな地域、家庭環境の中で農家の長男として生まれ育った和寛君が、学園の園芸コースを卒業し、佐久平に戻ったのは昭和四十八年三月であった。彼が家に戻ると同時に父親は土地改良区常任理事の任に着き、鮎の養殖ならびに農業経営の一切は彼の手に委ねられた。

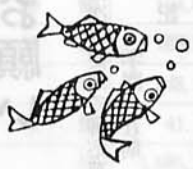
鮎の養殖改善に彼が取り組んだことは、まず第一に、父親と同様毎日の作業・観察日誌をつけることで、それは現在まで続いており、経営分析や経営計画を立てる際に役立てている。

第二は機械化をすすめ規模拡大と省力化をはかることで、自動給餌機、自動ゴミ取り機などの導入で規模拡大がすすみ、現在年間二〇トンの生産を上げている。

第三は品質向上をはかることである。鮎は天然に近い型・色のものが貴重がられる。もともと流水養殖のものの体型は天然ものに近いが、昭和五十九年に基本飼料にスプルリナ、オキアミ、クロレラなどを加える独自の飼料を考案した結果、天然鮎の持っているオレンジの斑点、側線、甘味、香気を引き出すことに成功し、東京築地市場で日本一の評価を受けた。ここ数年、彼の出荷した鮎は市場で一番先にセリにかけられている。つまり彼の出荷状況によって築地市場の他の鮎の値段が決まってしまうのである。ちなみに六十二年度の総売上額は二、八〇〇万円であった。

鮎の養殖が経営的にはうまくいっているといっても、鮎は本来弱い生きもので、不慮の事故を起こし易くきわめて不安定な経営とならざるを得ない。また地域の農家の九〇％以上は兼業農家で農業後継者問題も深刻だ。そうした自らの鮎養殖経営の不安定さと地域農業の将来性を見通して、昭和五十三年から水稲栽培の機械化を推進し、自作一・五haの他請負い耕作を開始し、現在では請負い面積が三〇haを越えた。その上、六十二年からは仲間夫妻と和寛夫妻ともう一人の計五人で有限会社「佐久平興農」を設立し、新たに大型ライスセンターを建設し、部分請負い分までを含めて、六〇〇〇俵の玄米を調整するまでになっている。ガット裁定を待つまでもなく、アメリカの対日農産物自由化圧力を見据えながら、最悪の場合食管制度が廃止されても生き残る道を模索している。そのために将来米穀取り扱い者の認定を受け、米を消費者に直接販売できる道を拓きたいと考えている。〝鮒・鯉が泳ぐ水田で穫れた安全で美味しい佐久米〟のセールスポイントで。現代版「稲田養鯉」の発想である。

このように鮎＋水稲の複合経営で、安定した農業経営を目指していると同時に、佐久平の農業を守ろうとして、頑張っている野村夫妻である。



埼玉支部会開催される

去る十一月二十一日、大宮市内で埼玉支部会と先輩を送る会がひらかれました。

支部会は十六人（出席率三〇％）が参加し、奥沢支部長（二期）と石塚祥治（二期）のお二人への退職記念品として、地元特産のガラスケースに入った人形をお贈りしました。

また、奥沢支部長にかわり、清水源也（七期）さんが選ばれました。清水新支部長は県改良普及職員協議会長で、全国の協議会の副会長をしておられます。

同窓会本部から和田会長が出席し、同窓会大会と学園の状況を報告するとともに、天笠真瑳子（十三期）常任委員の選任の経過を説明し、了承を得ました。

昭和63年度学生募集

財団法人
農民教育協会　鯉淵学園

会長　堀内巳次
学園長　松本正雄

●募集人員（本科 3カ年）
　農業科……80名
　（2学年から園芸と畜産のコースに分れる）
　生活栄養科……40名
●応募資格　高等学校卒業者
●受付期間　昭和62年11月21日（土）より
　　昭和63年 2月20日（土）まで
●選　考　書類選考
○普及専攻科（1カ年）
　本科卒業者が入学でき，これを卒業（見込）すると改良普及員資格試験の受験資格が得られる。
●生活栄養科卒業で栄養士資格が与えられる。

奨学金制度あり・自治的全寮制

詳細は500円（切手可）を封入のうえ下記へ
〒319－03　茨城県東茨城郡内原町
鯉淵学園教務部（0292－59－2811）

故武田勉氏（五期）著作集刊行のための募金のお願い

武田勉氏は昭和二十五年に学園を卒業後、農水省農業総合研究所に奉職され、三十六年間にわたり研究活動に従事して来られました。本年三月定年退官後は、母校で農業経済学の講師として後輩の指導に当っておられましたが、去る六月十七日病条のため急逝されました。

このたび、氏の総研時代の業績を偲んで同僚の諸氏が中心となり、次のような著作集が刊行されます。御賛同いただける方は次の要領で御応募下さい。

（学園・五期　砂田）

記

タイトル　「農村経済の展開と農業団体」
一　口　五、〇〇〇円　（何口でも可）

※尚、問合せは学園の関または砂田まで（電話〇二九二―五九―二八一一）趣意書、著作目次などお送りします。至急ご連絡下さい。

同窓会本部事務局体制の変更について

本会報、会長の挨拶にもありますように、同窓会本部事務局体制が変更になりましたのでお知らせいたします。

事務局長　菊池　崇（27期）
総務部長　山本英治（31期）
組織部長　小沼和重（29期）
情報部長　涌井義郎（31期）

以上の面々で新たに事務局として体制を整え活動していますが、全国の卒業生、会員に支えられて、頑張っていく覚悟ですので今後とも同窓会活動の活性化、発展のために御協力をお願いしたいと思います。

同窓会会員名簿を購入利用下さい

同窓会名簿がまだ余っていますので、希望者は学園事務局（〇二九二―五九―二八一一　広瀬）までご連絡下されば、お送りします。頒価二、五〇〇円（送料共）です。